

Essays on Ricardian Economics: A neoclassical formulation of Ricardian theories on general equilibrium, growth, and trade (内山隆) についての課程博士学位論文審査報告書

日付:

●評価:

本論文は、英国古典派経済学者リカード(D. Ricardo)の主張した経済理論を、投下労働価値説に基づく古典派経済理論の枠組ではなく、近代経済学の手法を用いて数理的に再検討を試みる意欲作である。審査委員会は、本論文が、リカードの経済理論を単に学説史の観点から見直すばかりでなく、その理論が投下労働価値説に依拠しない現代の経済理論の枠組みの中でも十分検討に値することを明確に示しているという意味で、学説史ならびに理論経済学の分野において大いなる貢献として評価する。とくに、リカード自身が土地、労働に加えて、機械が生産において果たす役割を重要視したものの、従来のリカード経済学解釈においてそれはほとんど軽視されてきた。著者は、機械を明示的に考慮して構築された数理経済モデルをもとにしてリカードの「機械論」を再検討するとともに、リカード経済理論の再構築を見事に行っている。これらの点を考慮して、本審査委員会では審査委員全員の一致した見解として、博士学位授与に十分値するものと判断する。

以下は、学位提出論文の構成の概略とその評価である。

●論文の目的とその特徴:

リカード経済学における中心的命題は、いわゆる利潤率と賃金率との相反関係にもとづき（労働雇用に際しあらかじめ資本家が用意していなければならない前払い資本も含めた）資本蓄積による利潤率低下法則にある。この命題を導く上で、リカードは投下労働価値説に依拠した。しかし、リカード自身が認めているように、投下労働価値説は経済で操業する各生産部門が互いに等しい要素集約度をもたなければならない。

そこで、本論文において、著者は必ずしも労働価値説が成り立たない経済についてもリカードの主張が成り立つか否かについて、近代経済学的数理モデルを構築することによって再検討する。ここで、投下労働価値説に対する近代経済学的手法とは、単に部門間の要素集約度が異なることだけを意味するの

ではない。投下労働価値説に基づく従来の古典派経済モデルでは、労働以外の生産要素が用いられる経済であっても、各生産物の生産に必要な生産要素の投入係数が一定の技術、すなわち単一のアクティビティーによって記述される技術が前提とされていた。これに対して、著者は、多数、そして極限では無限に利用可能なアクティビティーからなる技術、すなわち要素間のスムーズな代替を認めた新古典派的生産関数を前提とした経済モデルを採用している。これが、著者が副題に「新古典派的定式化」と記した理由である。

用いられている理論分析の特徴は、①上述のような機械をも考慮した生産要素間のスムーズな代替を認めた新古典派的生産技術、②現代経済学で用いられる利潤最大化原理に基づいた企業行動を踏まえながらも、経済構造のとらえ方について現代の経済理論と古典派のそれとを分かつ次のような特徴を明示的に取り込んでいることにある。

(i)労働雇用に際しあらかじめ資本家は前払い資本を蓄積しておく必要があり、その規模によって雇用量が制約を受けること。

(ii)労働雇用に必要な前払い賃金資本と機械という2種類の資本間における収益率の均等化。

(iii)マルサス流の人口原理に基づいた労働人口の内生化。

とくに(ii)の条件を短期均衡条件として取り込めば、新古典派経済モデルでは生産物需要条件を考慮しなければ決定されない生産物価格体系が、供給サイドの条件だけにより決定されるメカニズムが説明される。また、長期均衡条件として取り込むことにより、前払い資本と機械という2つの資本の蓄積経路が決定されるメカニズムが決定される。

## ●主要な貢献：

リカード経済理論では、(供給量の限られた)土地、(生産活動を通じては再生産できない)労働、そして(再生産可能な)機械という3つの生産要素が登場する。リカードは『経済学および課税の原理』第3版において機械導入の効果を分析した章を追加し、機械の導入が短期的に労働雇用を減少させる可能性があることを示したが、その章と投下労働価値論に基づく他の諸章との理論的整合性に問題があることは、以前から指摘されてきた。また機械は、リカードの「機械論」を読むまでもなく、経済成長において重要な役割を果たしているものの、従来のリカード経済学の数理モデル分析においてはほとんどの場合無視、または軽視されてきた。著者は、機械生産部門を明示的に導入したリカードの理論体系を再構築し、機械の導入により経済の短期的パフォーマンスだけでなく、中長期的なパフォーマンスがどのように異なってくるか、そしてリカード

の中心命題である農業生産の拡大に伴う利潤率の長期的低下の主張が労働価値説の成り立たない新古典派的特徴を持つ経済において成り立つためにはどのような条件が必要かを厳密に明らかにしている。

### ●個々の章についての評価：

第1章は、学位論文を通じた研究目的ならびに各章の紹介にあてられているので、第2章以降について評価を絞ることにする。

#### ○第2章：A Ricardian two-sector corn model: A neoclassical generalization

第2章では、従来のリカード経済理論解釈に基づきつつ、すなわち土地と労働という2生産要素を用いて食料・奢侈財の2財を生産・消費する閉鎖ならびに開放経済について先に記述した意味で「新古典派的」枠組でリカードの主張が再吟味される。とくに注目すべき点は、仮に従来のリカード経済理論解釈におけるように機械の果たす積極的役割を無視し、その上で新古典派的枠組で解釈し直した先行研究とは異なり、貿易構造決定における現代の貿易理論での標準的定理であるヘクシャー・オリーンの要素賦存比率命題とリカードの比較優位論との整合性を明らかにしたことにある。より具体的には、長期定常状態に到達した後での貿易とそれに到達する以前の状態での貿易とは峻別されるべきであり、後者の状況では仮に長期定常状態において貿易機会に恵まれても貿易を行わない国同士であっても、定常状態に到達以前ではヘクシャー・オリーンの要素賦存比率命題にしたがった貿易パターンが実現し、かつその貿易パターンは貿易開始後も変わらずそのまま定常状態に向かうことが示されている。

動学的な枠組で2国間の貿易パターンがどのように決定され、変化していくかは純粋に新古典派的な枠組では鬼木・宇沢の論文などにより既に議論されている。しかし、そうした分析とは異なり、マルサス的な人口論と前払い賃金資本の蓄積に基づく労働供給の内生的決定を踏まえた貿易構造の決定理論という点では、現代の貿易理論において既に得られている結果とは異なる経済を前提としているという意味で新しいばかりでなく、古典派経済学者が考えていた経済と現代の経済学者が考えているそれが類似している面があるという意味でも興味深い。

#### ○第3章：A Ricardian two-sector machinery model: A discrete-time model under the Leontief technology

第3章は、既に Journal of the History of Economic Thought, vol. 7

(2000), pp.208-27 に公刊された著者の単独論文(Ricardo on Machinery: A Dynamic Analysis)に依拠しており、本学位論文を通じて著者が目指すリカード経済学の現代的視点からの再構築という目的の出発点として位置づけることができる。リカード自身が著書『経済学および課税の原理』を通じて機械という資本の役割について論じながらも、その導入が資本主義経済、とくに労働雇用に対して及ぼす影響が論じられているという面で「機械論」は従来からリカードの経済理論に関心を持つ者の間では興味深かった。たとえば森嶋・根岸両教授による機械導入に伴う失業発生とセイ法則の関連性についての議論が有名だが、著者は、こうした議論を超えて、より具体的には、機械導入時における完全雇用、そして機械導入後の（マルサスの人口原理に基づく労働人口調整後の）均衡において労働雇用量が機械導入以前よりも増加するための条件を導くばかりでなく、かつ従来の理解とは異なり機械導入により経済の総生産物が減少することが労働雇用量減少を引き起こすための必要条件ではないことを明らかにしている。これは従来の学説史論争における新たな視点を切り開いたという点で、大きな貢献と評価される。

#### ○第 4 章：A Ricardian two-sector machinery model: A neoclassical generalization

第 3 章の機械の導入を受けて、本章以降では労働雇用に必要な前払い資本（賃金基金）と機械という 2 種類の資本が明示的に考慮される。新古典派または現在の経済理論とは異なる、投下される各種の資本で見込まれる収益率の均等化といった古典派的競争均衡条件が重要な役割を果たす。こうした収益率の均等化といった競争原理は、ポスト・ケインジアンミクロ的基礎となる Sraffa 流のマーク・アップ原理、または産業間の利潤率均等化の考えた方と類似している。しかし、論文でも明らかなように、Sraffa 的競争観と著者が考えるリカード的競争観とが同一の競争均衡条件をもたらすのは、機械の資本減耗率が 100%となる場合に限られる。別のいい方をすれば、Sraffa の考えていた経済では各資本の減耗率が等しい場合に限られる。この意味で、著者が定式化した経済は Sraffa やその後のポスト・ケインジアンが考えた経済とも異なり、かつ古典派経済学者たちが考えていた経済を忠実に再現していると考えられ、その限りでリカード経済理論を体系的に理解する上で適切な方法といえる。

以上の点を踏まえつつ、著者は前払い資本と機械資本の収益率が短期的にも均等化することを求めたとき、言い換えると長期定常状態において生産物の価格体系が供給サイドの条件から決定されるという経済理論的に言えば強力な価格決定理論の基礎付けを行う一方で、古典派経済学説における価格決定における供給構造条件の果たす重要な役割を理論的に明らかにしていることは注

目に値する。また、仮に両資本間で収益率が短期的に均等化しなくとも、両者の違いに応じて資本家が資本蓄積経路を選ぶ結果、どのような長期成長経路が実現するかも詳細に吟味されている。異なる資本間での収益率の違いによりそれぞれの資本蓄積がどのような経路を辿るかについて、これまでに述べてきたような意味での古典派的経済の枠組で検討されたものは先行研究には見いだすことはできない。この意味でも、著者の研究は高く評価される。

○第5章：A Ricardian two-sector model with the non-instantaneous Malthusian population adjustment mechanism

第5章では、第4章でも既に吟味された前払い資本と機械資本との間での収益率が必ずしも瞬時、言い換えると短期的に均等化されない一つの原因として、古典派経済学で多くの場合想定される瞬時的なマルサスの人口調整が不可能な場合が検討される。リカードの主張が確認され、また他方でそれは宇沢教授らによる新古典派的な2部門成長モデルと同様の結論が導かれる。だが、新古典派的成長モデルとは異なり、マルサスの人口原理に基づくモデルが構築されていることに著者の貢献が認められる。

○第6章：A Ricardian three-sector model: A neoclassical formulation

第6章では、従来のリカード経済理論解釈と著者自身が重要視する機械の役割をとともに取り込んだ一般的、総合的な（著者が定義する意味での）新古典派的経済モデルのもとで、リカード経済理論が現代経済学の視点から再吟味される。より具体的には、土地・労働・機械という3要素を用いて食料・奢侈品・機械という3財が生産される（ただし、土地は食料生産だけに用いられるいわゆる特殊要素である）経済モデルが構築され、リカード経済理論の主軸となる利潤率低下法則が再吟味される。得られた興味深い結論の中でもとくに注意を惹くのは機械生産部門に比べて奢侈品生産部門の方が機械・労働比率が高い場合には、前払い資本の蓄積が利潤率上昇を引き起こし資本蓄積を一層拡大するインセンティブを生むという結果である。これはリカードの主張が、投下労働価値説が成立しない経済では、成り立たないことを理論的に明らかにしたという意味で非常に興味深く、学説史上リカードの経済理論を理解する上でも重要な貢献と評価される。

●一層の研究を期待して：

以上のように、申請論文はが、申請学位論文に対して学位授与に値する業績として認める理由である。だが、審査委員会の一致した見解として、いくつか問

題が指摘された。とりわけ重要なのは、次の点である。

- ①本学位論文が専門家を対象としているためかもしれないが、本学位論文で問題とされている論点についての、リカード経済理論の学説史上における論争の整理が不十分である。
- ②古典派経済学と現代経済学との間における企業間ならびに市場間の競争のとらえ方の違いについての学説史的見地からの整理が不十分である。
- ③現代経済学の視点から見たリカード経済理論の単なる再解釈を目指しているのか、それともリカードの生きた時代における経済問題を現代経済にも見いだしつつその現代的意義を明らかにすることも目指しているのかについて、目的がやや不明瞭である。

第3の問題は、本論文が基本的に経済学説史研究の論文であることを踏まえるとやや要求水準が高すぎるかもしれない。また、第1、第2の問題についても、学位論文を構成する各章を独立した論文としてみたときにはその完成度が高いことを踏まえると、この学位請求論文をもとにより広く、統一的見地から著者自身が抱いている考えをまとめ上げることが期待する。これらは、学位請求論文の評価を下げるというよりもむしろ、著者の研究が今後一層発展する方向を示唆できればと言う審査委員会からの期待を表した問題提起としたい。

以上

本審査委員会

主査 清野 一治

副査：石井 安憲

永田 良

渡会 勝義